



なごや「聖歌」だより11月号2012

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



5. オルトドクサ、教義と礼拝

Lex orandi, lex credenti、礼拝の法は信仰の法

正教会Orthodoxは自らをオルト・ドクサortho-doxa「正しい教え」と呼びます。実は「教え」と訳される「ドクサ」は讃美という意味も持つ語です。正教会は「正しい讃美」すなわち正しい礼拝を守る教会で、つまり「正しい教え」と「正しい讃美」は同じ意味を持ちます。

教会の最初の数世紀は異端との戦いでした。グノーシス、アリウス、ネストリウス、単性論など間違った教えが次々と現れ、教会はギリシア哲学の用語も借用しながらより正確な表現を探し正統信仰を固めてゆきました。異端が問題なのは理論的な整合性をそこなうからではなく、間違った理解は信仰を逸脱させて人間を滅ぼしてしまう可能性があるからです。ですから異端論争の結果は礼拝に反映され教義的な歌が加えられました。礼拝の中で正しい教えを学び、身につけるのです。

聖体礼儀で、ニケア(325)・コンスタンティノーブル(381)全地公会で採択された「信経」が全員で唱えられ(歌われ)*ています。第2アンティフォン後に歌われる「神の独生子」は、ユスティニアヌス帝**の作とされ、ビザンティンでは入堂の前に会衆も参加して何度も繰り返して歌われました。神が至聖三者(三位一体)であることを短く歌うドクソロジー(頌栄)「光栄は父と子と聖神に帰す***」も礼拝の各所に挿入されました。

逆に長く礼拝で行われてきたことは正統信仰の証明となりました。4世紀の聖大ワシリー(カッパドキアのバシレイオス)は『聖霊論』の中で、晩課で歌われる「聖にして福たる」を引用して、昔から「父と子と聖神」と歌ってきたのではないかと述べ、至聖三者(三位一体)の信仰の論拠としました。礼拝は聖神の立ち満ちるところ、神の臨在するところですから、そこで長く歌われてきたという事実そのものが、聖神による正統信仰の証明であると考えられました。

今月の予定

聖歌練習 半田 11月7日(水)12時ごろから

半田も降誕祭を4部合唱で歌ってみましょう。

名古屋11月11日代式後。降誕祭の練習を始めます。

名古屋指揮当番

4日ピーマン松島 18日エレナ広石 25日マリア松島

また異端論争の時代には、聖体礼儀中に誰の名前が記憶されるかということが衆目の的でした。つまり、聖体礼儀で記憶されることが神の前での正統派として認証されることで、正統とされた主教の名が二つ折りの板で作られた記憶録(ディプティコン)に書かれ、読み上げられました。今でも独立教会の首長が司禱する聖体礼儀では、「聖変化」の後、聖人や生神女マリアを記憶した後、世界すべての正教の独立教会の首長を記憶し合い、信仰の一致を確認します****。

礼拝で行われることは正統信仰を表すものでなければなりません。だからイコンも聖歌も、いかに芸術的に優れていても正教会の信仰理解と異なるものは取り入れることはできません。



*ギリシア教会では唱えられ、ロシア教会では輔祭が会衆を先導して歌われる。ロシアで歌われるようになったのは百章(ストグラフ)会議(1551)の決定による。

**ユスティニアヌス大帝(在位:527-565)は為政者として、カルケドン公会議後(451)ぎくしゃくしていたアンティオキア派とアレキサンドリア派の融和を図ろうとした。

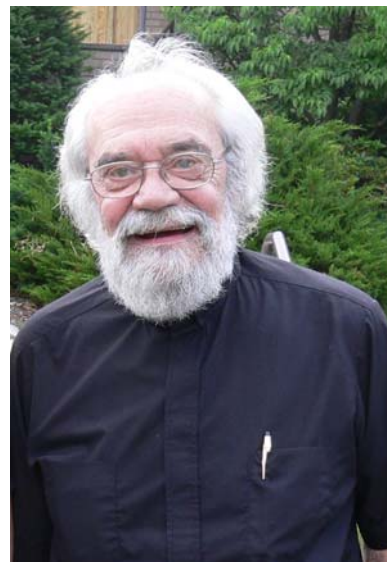
***ドクソロジーは初期には「光栄は父に、子を通して、聖神において帰す」だったが、アリウス派への対応以後、至聖三者の三者性を強調して、父と子と聖神を並列する今の形になった。(Dictionary of Byzantium, Oxford)

****司祭祈禱の場合は直属の主教を記憶する。一般の主教の場合は所属する教会の首座主教を記憶する。たとえば日本の場合はロシア教会から祝福された自治教会(アフトノミア)なので、日本教会の首座である東京の府主教を、東京の府主教は母教会のロシア総主教を記憶する。総主教は世界の独立教会の首座主教を記憶する。

祈りの音楽 — 奉神礼音楽を考える

セルゲイ・グラゴレフ神父という教会音楽家、作曲家がいます。もう80歳になられる老神父で、40年ほど前「英語で聖歌を歌おう」という運動が始まったときから長年「母国語」の聖歌、アメリカの正教会の聖歌を模索してこられた方です。伝道教会として始まった日本と異なり、アメリカの正教会は移民が母体としてできた教会なので「スラブ語でなくては」「ギリシア語でなければ」正統な礼拝ではないという偏見も強く、すでに若い世代はロシア語もギリシア語もわからないのに、出身民族の言語や音楽にこだわる人も多くありました。また、始まったばかりの英語の聖歌は、音楽とことばが不調和でギクシャクしたものでした。これについては2005年の大阪教会での講演会「祈りの音楽*」でモロザン博士が報告された通りです。モロザン博士もセルゲイ神父の教えを受けた教会音楽家のひとりです。

*講演録在庫あります。お問い合わせください。



私が初めてセルゲイ神父の聖歌に出会ったのは、2003年ニューヨークのウラディミル神学校の夏期講習に初めて参加したときです。シンプルで覚えやすいメロディ、簡単で美しいハーモニー、ソロと聖歌隊の生き生きした掛け合い、確かにビザンティンの伝統、ロシア音楽の芸術性を継承しながらも、誰でも参加できる聖歌、また英語の歌詞が軽やかに音楽に乗っていて、率直なアメリカらしさも溢れていました。「なんて楽しい、いつまでも歌っていたい…」そう思いました。

新しいシリーズでは、セルゲイ神父のエッセイ『奉神礼音楽に翻訳する』『聖なる音楽の響き』(The Orthodox Church music, OCA, 1983掲載)をご紹介しながら、私たちの目指すべき日本の聖歌、日本語の「祈りの音楽」への具体的なヒントを探してゆきたいと思います。

Praise the Lord from the Heavens (No. 1)

Psalm 148:1

Andante con moto. Fr. Sergei Glagolev (1979)

mf

Soprano Alto

Praise the Lord from the heavens, praise Him in the highest!

Tenor Bass

mf

Al - le - lu - ia, al - le - lu - ia, al - le - lu - ia!

セルゲイ神父の作品から「天より主を讃め揚げよ、至高きに彼を讃め揚げよ」(主日領聖詞)148聖詠と組み合わせで行う。

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料